

中部の

エネルギーを 築いた人々

高遠電灯を創設した
豊島 恕平と黒河内 千代太郎

伊那市高遠町は、高遠城址の桜で知られる伊那谷の城下町、宿場町である。明治45年伊那電車軌道が上伊那地域に開通すると、路線から外れた高遠町は次第に寂れるようになった。県会議員で医師の豊島恕平、酒造業を営む黒河内千代太郎ら高遠町の有力者は地域発展策に取り組み、そうした中で創設されたのが高遠電灯であった。初代社長が豊島恕平、黒河内千代太郎が第2代社長となり、第3代社長の黒河内義夫のとき伊那電気鉄道(大正8年伊那電車軌道から改称)に合併された。本稿では、高遠に電気を灯した先覚2人の生涯と事業活動について紹介する。



豊島 恕平
『高遠町誌 人物編』



黒河内千代太郎
『高遠町誌 人物編』

豊島恕平と高遠電灯の創設

豊島恕平(1862～1920)は、高遠藩士亀井則義の9男として高遠町に生まれた。長崎県で裁判所刑事部に勤める、親戚筋の豊島篤次の養子となり、明治11年長崎中学を卒業、同17年に長崎医学校を卒業し、医師の免許を取得した。卒業後、三菱高島炭坑病院に勤務したが、向学心の強い豊島は、22年上京して順天堂病院で外科を、山竜堂病院で内科を、さらに北里柴三郎の伝染病研究所で細菌学の指導を受けた。30年、郷里高遠町に戻り豊島医院を開設した。33年には高遠小学校・長藤小学校の校医の嘱託を受け、赤痢が大流行した際行った適切な治療で知事の表彰を受けた。40年から上伊那郡会議員となり、

44年から長野県議会議員として2期8年間を務め、高遠の発展に尽くした。

当時上伊那郡の1町6ヶ村で電気を供給していたのは長野電灯伊那支社であった。同社は、明治39年ころから諏訪電気から受電して電灯事業を始めだが、大正2年1月、伊那町に小黒発電所(225kW)を建設し、電灯事業の拡大を目指した。県会議員で同社社長の花岡次郎から、電灯のついていなかった高遠町への供給について打診があった。豊島は黒河内千代太郎等、高遠町の有力者と相談し、大正2年10月、高遠電灯を創設し、長野電灯伊那支社から電力の供給を受けて高遠地方の1町6ヶ村への供給を開始した。初代社長

には、豊島恕平が就任した。

豊島は電灯事業の他、三峯川・藤沢川沿岸での宅地造成、高遠劇場の創設と花街づくり、伊那町・高遠町間を結ぶ高遠電気軌道等の事業を進めた。高遠電気軌道は、大正9年9月、軌道布設の特許を受け、用地買収もほぼ完了したが、採算上の懸念から計画は頓挫した。伊那と高



豊島恕平銅像台座

遠を結ぶ道路は、当時買収した伊那電車軌道の線路用地であり、高遠電気軌道の遺構ともいえよう。高遠劇場は既に無くなったが、劇場のあった桜町には豊島を顕彰した銅像が建っていた。第2次大戦中の金属供出で撤去されたが、台座は現在も残っている。

黒河内千代太郎と戸台発電所の建設

豊島の後を継いで高遠電灯の社長となったのが、黒河内千代太郎(1860～1931)である。黒河内は、万延元年、太松酒造店を営む黒河内松治郎の長男として生まれた。太松酒造店は、(株)仙醸と名称を変え(昭和48年)、南信州を代表する銘酒黒松仙醸を現在も製造している。黒河内



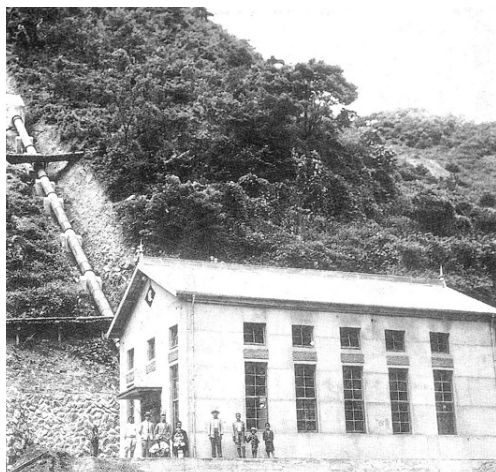
(株)仙醸 旧本社



(株)仙醸に贈られた戸台発電所銘板

は家業に励む傍ら、町会議員を務め、高遠劇場取締役、上伊那銀行取締役就任するなど、豊島と共に高遠の発展に尽くした。

近隣の赤穂村は長野電灯伊那支社の供給区域となっていたが、大正2年から4年にかけて、村営事業を計画して同社と激しい闘争を



戸台発電所本館(当時)
『伊那谷 電気の夜明け』中部電力飯田支社



高遠変電所(当時)「電力絵葉書博物館」

繰り広げた（赤穂電灯騒擾事件）。高遠の町でも「我が町の水は我が町の手で」という郷土意識が高まり、黒河内は自前の発電所づくりを進めた。小黒川上流、標高1000mの地点に戸台発電所（当初は小黒川発電所と呼ばれたが、昭和13年2月に戸台発電所に改称）の建設を進めた。大正10年12月に水利使用を申請し、同12年7月に許可となった。当時戸台分教場で教師をしていた70余歳の武井翁が分教場の岩に筆で●を付けて高さを測り、洪水位等を測定するのを、黒河内は馬に乗ってしばしば視察に来ていたという（高遠電灯勤務伊藤博雄氏の回想）。村民たちは「電気は怖い」と言って買収を渋り、山間地にもかかわらず用地取得は難航した。建設工事では資機材の運搬が大変だった。大型の機材は分解し、冬期、黒川の凍結を待つて馬車で運搬し、川からは人の背で運びあげて組み立てた。戸台発電所は大正15年8月、運転を開始した。開渠と暗渠とで約1440mを導水し、有効落差84.8mを得て430kWを発電する流れ込み式発電所であった。電気は、高遠の変電所まで約10kmの送電線を敷いて送られた。発電所は、90年たった今も小黒



戸台発電所 堰堤現況



戸台発電所構内の「水神様」



黒河内義夫

川の清流に運転を続けており、構内には水神様の碑（昭和17年6月建立）がひっそりと祀られている。

黒河内千代太郎は昭和6年8月に逝去し、第3代社長として黒河内

義夫（1889～1971）が就任した。高遠電灯は、昭和12年12月、政府の勸奨により、伊那電気鉄道に合併され、黒河内義夫社長の手で幕引きが行われた。黒河内義夫は、千代太郎の婿養子で改称された高遠酒造を継いだほか、高遠町会議員を2期務め、上伊那銀行の取締役となり、昭和22年には高遠町長を務めた地域のリーダーであった。

（浅野 伸一）